

(二) 3年生の実践

社会科で、地域探検に出掛けた。学区内を歩いてみると、山のふもとまで茶畑が広がっていることに目がいく。地元の茶農家に茶摘み体験をさせてもらったことをきっかけに、自分たちもお茶を作ったり、いれて飲んだりしたいと子どもたちは思った。



J Aの方や茶業組合の方の協力を得て、手もみ茶作りやお茶のいれ方を学んだ。保護者へのお茶会を経て、さらに多くの人に岩北のお茶を飲んでもらえるのかを考えた。パッケージを工夫したらどうか、CMを自分たちで作りたい、お茶に合うお菓子を作ってみたいなど、自分たちにできそうなことを考え実現していった。実際にお茶屋に向き、自分たちが作ったラベルを貼った商品を置いていただいたり、地元のお菓子屋さんに作り方や工夫、作る上での努力等を教えていただいたりした。

子どもたちはこの活動を通して、徐々にお茶が好きになり、家で家族のためにお茶をいれる子も出てきた。また、自分の生きる地域のすばらしさやそこ

に生活する人々の魅力に触れたり、お茶離れが進む現実にも突き当たったりして、地元の特産物を大事にしていきたい、緑茶を飲む文化を将来につなげていきたいと、日本人としてのアイデンティティーを育むきっかけとなったと考えている。

(三) 5年生の実践

社会科の学習で富士川の雁堤のことを学んだ4年生の子どもたちは、何十年間もかけて岩松地区を富士川の氾濫から守るために努力した偉人がいたことを知った。5年生になると理科で流れる水のはたらきについて学習する。そこでは、数百年前の富士川の流れを再現し、災害を検証することで、岩松地区側に雁堤を造った理由を、体験を通して知ることができた。そして、このことを地



域の方々にも知ってもらおうと、劇にして地域の方々に発信した。これらの活動を通して、郷土を愛し、自分たちの生まれ故郷をいつまでもすばらしい街として守っていききたいと感じることができた。学習している過去の出来事が、今生きている私たち

の生活の元になり、未来にもつながっていることを実感できた。さらに、この学習で学んだことを基に世界へと目を向けさせた。砂漠に住む人、南の島に住む人、世界中どここの土地であっても人々が歴史をつくり、今の文化や生活が成り立っていることへ思いをはせることができた。

(四) 他校との交流

また本校は、福島県のユネスコスクールである福島県須賀川市立白方小学校と交流をしている。ユネスコスクールであることをきっかけに、遠くの人と互いの活動を知らせ合ったりする活動を通して、他地域の人々と抵抗なく関わったり、心を通い合わせたりする喜びを味わい、コミュニケーションをとることへの意欲や能力を養うことにつながっていると考えている。

(五) 地域への発信

学校では、地域の方々に多くの協力をいただいている。地域に出て行ったり、地域の方に授業に入っていたりする機会はとても多い。岩松北地区には、製茶工場、パン屋、J Aや郵便局、茶農家やみかん農家など、子どもの学びと関わることでできる施設や人材がとても豊富である。この地域の方々

に学校の活動やその意義について知ってもらうことは、協力を得る上で大切なことである。そのための一つとして「岩北ユネスコスクールだより」を発行している。「岩北ユネスコスクールだより」で、ユネスコスクールとは何かということと同時に、けやき学習の途中経過や生活科の活動を紹介することでESDとはどのような教育なのかを知っていただくことにした。学校側から情報を公開することで少しでも学校教育に対する理解を深めていただくきっかけになればと願っている。

おわりに

オックスフォード大学教授が2013年に、「今後20年間ですべての仕事の47%が自動化される可能性がある」と推測し話題になった。今の小学生が就職するころには、私たちの想像することができない社会が待ち受けているかもしれない。そのような時代であっても、時間的にも空間的にも広い視野で、柔軟に問題に対応でき、解決していける人こそがグローバル人材になるであろう。今後もESDの考え方を進め、世界に目を向け、自らの手で未来を創っていく子どもたちを育てていきたい。